

8.朝見川エレジー(2)

蓮田川の上流から桃太郎公園を抜けて、左に曲がり朝見川の右岸沿いに少し歩くと赤く塗られた御幸橋が見えてくる。この橋は朝見八幡社への参道の入り口になるため、橋のたもとに鳥居が立っている。反対側の左岸には竹材を扱う会社がある。わたしが子どもの頃は別府市市内各地にたくさんの竹会社（わたしたちはそう呼んでいた）があったのだが、どうゆう訳か火事になることが多く、今ではここを含めても希少な存在になってしまった。

鳥居を左手に見ながら川沿いに歩くと次が栄橋、その次が第一水道橋、名前こそ第一水道橋などと無粋な名前だが、朝見八幡社に初詣のお参りをする際は大勢の人たちが、旧西小学校（現在は浜脇中学校と山の手中学校の統廃合によって西中学校となっている）の



赤く塗られた御幸橋の左側(右岸)に鳥居が見えている。

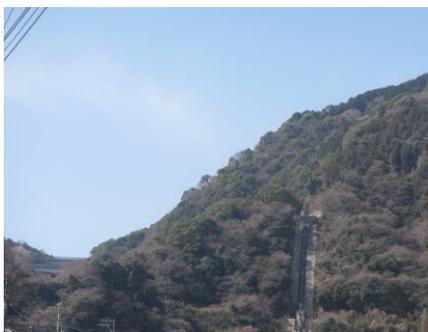


鮎返り川の合流点だけ見ると、この上にかつては別府市民の喉を潤していた水源ダムがあるとは思えないほど小さな流れだ。

乙原川の乙原ダムが、別府市の境川以南の中心市街地の水源地だったが、荒金啓治市長の時代、さらなる人口増加が見込まれたことから、大分川から長いトンネルを開削して、今では大分川の由布市庄内町西から取水された水が、12.8キロメートルの水路と8キロメートルのトンネルで朝見の浄水場に送水されている。現在、別府市の上水道の計画水量75,700立米/日のうち、実に52,000立米、68.7%が大分川から来ている。別府市民たるもの荒金啓治元市長にはどれだけ感謝してもしきれないのではないかと。

合流点のすぐ上流には歩行者専用の人道橋がある。どうしてこの人道橋が出来たのか経緯は不明だが、左岸には海岸から登ってきた中浜通りがここで終わり、対岸の

グラウンドに三が日だけ特設される駐車場に車を置いて、この橋を渡ってお参りする。水道橋という名前の通り、橋を渡って道なりに上って行くと、水道局の浄水場がある。昔は花見の名所だったが、今はサクラも伐られてしまっって昔の面影はなくなった。仕方がないので第一水道橋に戻って今度は左岸側を歩く。次が仲の橋、そのすぐ上流が鮎返り川の合流点だ。鮎返り川の上流にはその昔、川の名前の由来となった滝があった。その滝の滝壺が上水道源の一つで、そこから朝見浄水場に送水されていた。その後別府市の発展と共に水不足が深刻となり鮎返り滝の場所にダムを建設した。以降、わたしが子どもの頃まではこのダムとラクテンチ側の



朝見浄水場から見える別府発電所の送水管。左奥に鮎返りダムが小さく見えている。はるばる大分川から標高差を利用して流れていた水はここで発電に利用されたのち、朝見浄水場で水道水となる。



八坂神社に向かう祇園橋。奥の左側が八坂神社だ。

右岸側には30戸ほどの住宅地が広がっている。

次の橋が祇園橋だ。橋の左岸側に鳥居が立っていて、そこから赤い橋を渡ると八坂神社が鎮座している。八坂神社の古名が祇園社というところからつけられた橋名のようなのだ。

縁起の書かれた看板を見るとこの神社が勧進されたのが養老年間の717年、この地に鎮座したのは何と鎌倉幕府開幕の年1192年である。朝見八幡社が1196年の建立なので、それより古い神社である。この神社にはご神木としてイチヨウの老木が2本あり、秋には遠くからも美しく黄葉した姿を見ることができる。

もう一度橋を渡って左岸側に戻り、しばらく歩くと金山歩道橋という名前の立派な人道橋がある。この金山と



地域の生活の利便性のためなのだろうが、住民の数の割には、ずいぶん立派な人道橋が掛かっている。

いう名前にも由緒がある。今のラクテンチの山は金鉾山として開発が計画され、あまりの高温のため採掘を断念したという話が残っている。そのすぐ上流側が木村橋で、そこを渡るとラクテンチのケーブル駅である。

ラクテンチに向かって左側には今は別府市の学校給食センターが立っているが、わたしたちが子どもの頃は50メートルのコースを持った温泉プールがあり、年に何度かは南小学校から歩いてここまで来て、水泳の授業を受けたものだ。もちろん、何も公式試合や授業がない土日は一般に開放されていて、わたしもよく友だちと誘い合って泳ぎに来ていた。プールの水温は夏場は結構冷たかったが、体が冷えてくると併設されている温泉に入って温まったものだった。



金山歩道橋の上流側にラクテンチ下駅に向かう木村橋が見えている。ガードレール製の白く塗られた欄干が真新しい。

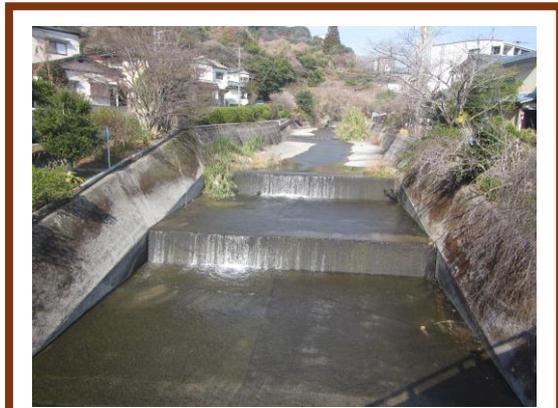
木村川のすぐ上流側に山側から乙原川が合流している。この川の中流に乙原ダムがあり、別府市に公共の上水道が初めて給配水されるようになった時からの水源だ。出来た当時は別府駅から南側の中心市街地に給配水していた朝見浄水場の送水量は乙原ダムが6割、隣の鮎返り川にあった滝からが4割だったそうだ。乙原ダムは今でも微々たる量とはいえ（日量40トン）とはいえ現役の水源地なので一般の人は入れないが、乙原の渓谷の



乙原ダムの完成は1917年3月で、当時の雰囲気漂わす取水塔は、100年以上たった今でも現役の姿を見せている。

り川にあった滝からが4割だったそうだ。乙原ダムは今でも微々たる量とはいえ（日量40トン）とはいえ現役の水源地なので一般の人は入れないが、乙原の渓谷の

木々の間に神秘的なエメラルド色の水を湛えて佇んでいる。3月上旬、雨が少ない時期だったが思ったより多い量の水が溢流口から流れ出ていた。



雲仙寺橋から上流側を望む。この辺は昔は葎がたくさん飛ぶ、生態系豊かな河原が広がっていたが、三面コンクリ張りの見るも無残な姿になってしまった。

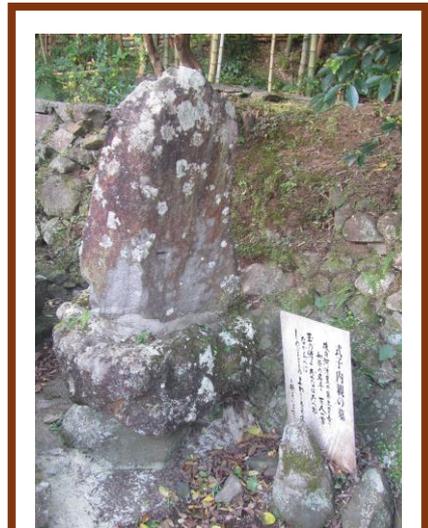
ラクテンチに上るケーブルカーを正面に見るのが木村橋、乙原川は木村橋の下で朝見川に合流している。その上流に掛かるのが木村小橋。この橋の左岸側に今は上原町の住宅街になっているが、わたしが小学生の頃、当時の養鶏の主流だった白色レグホンの種鶏用の孵化場があり、選別されたオスのヒヨコを1羽1円で売っていた。10円でおまけも入れて15くらいは分けてくれた。それを大事に家に持って帰って、急ごしらえの飼育箱を作って育てたものだ。ハコベやダイコン、ニンジン葉を刻んだものに米ぬかを混ぜてエサにしていたが、無事中雛まで育てるのは難しく、やっと育ったと思ったらネコやイタチに持っていかれた。その内、街中狭い場所

で飼っていたため、臭いと親に言われ泣く泣く小学校に持って行ったり、焼鳥屋に引き取ってもらったりした。

その次が雲仙寺橋となる。この橋はラクテンチ下駅（昔は温泉プール前）から、流川通りと富士見通りの交差点、現在の明豊学園の前まで行くバス通りだったが、今はバス路線は廃止になっているようだ。

雲仙寺橋から一の出橋までは川沿いの道がないのでちょっとの間、川から離れ一の出橋を左岸側から渡る。この上には展望露天風呂のある一の出会館がある。しばらく右岸沿いに歩くと名前のない橋が架かっていて、そこから先はまた川沿いの道がなく、仕方がないので橋を渡って、大回りして吉弘統幸陣所跡を通過して観海寺の旅館街に上り、観海寺橋を右岸側にわたる。朝見川遡上はここまでだが、右岸側の山の上に観海禅寺という古刹がある。ここに後白河上皇の第三皇女で、藤原定家との関係で有名な式氏内親王の墓があるというのが不思議でお参りしてみる。藤原定家といえば彼が選んだ百人一首のなかの式氏内親王の「玉の緒よ 絶えなば絶えねながらへば 忍ぶることの よわりもぞする」は有名である。

その式子内親王がここの観海禅寺に葬られたというのである。確かに式氏内親王は父親である後白河院が亡くなった後、都から追放されそうになった。しかし、追放はされずに都で生涯を全うしたというのが史実のようだ。しかし、追放されたために当時の豊後の領主大友能直の内室、風早禅尼が中興した尼寺観海寺において尼宮承如法として晩年を過ごしたというのが、この観海禅寺に口伝として伝わっているというのである。観海禅寺には式子内親王の墓と風早禅尼が内親王を茶毘にふした跡と伝わる塚もある。



観海禅寺の境内にある式氏内親王の墓と伝わる墓石。内親王を偲ぶよすがとしては、あまりにも粗末な気もするが、彼女の晩年の不遇と考え合わせて、これはこれで辻褄があっているのかも知れない。



観海寺橋は大正時代に掛けられた石造りのアーチ橋。この橋を渡った小高い場所に観海禅寺はある。

史実としては式内親王が別府で晩年を過ごしたことは考えられないのだが、彼女の不遇な後半生、藤原定家との間をささやかれていたロマンス、評価の高い彼女の和歌などを考えると、彼女がこの風光明媚で温泉もある場所で、最晩年を過ごしていて欲しかったという当時の関係者の思いが、こんな伝承の形で伝わっているのだろう。わたしは式内親王に所縁のある当時の人々の、その思いを大切にしたいと改めて感じながら粗末としか言いようのない墓所に手を合わせた。

御幸橋(朝見八幡社)～栄橋～第一水道橋(鮎がえり川)～仲の橋～人道橋～

祇園橋(八坂神社)～金山歩道橋～木村橋(ラクテンチ)～木村小橋(乙原川)～

雲泉寺橋～一の出橋(一の井出川)～名無しの橋～観海寺橋